



# 拾 蔭

Yuin

北海道大学附属図書館報

## 目 次

|                                     |                                   |
|-------------------------------------|-----------------------------------|
| 巻頭言                                 | 教員著作寄贈図書……………13                   |
| 『十五少年漂流記』から『大東亜戦争陸軍衛生史』へ            | 平成16年度 図書館統計……………14               |
| 附属図書館長 逸見勝亮……………1                   | 会議……………18                         |
| 北海道大学学術成果コレクションの実験運用について… 4         | 図書館委員会委員名簿・北分館委員会委員名簿……………20      |
| 情報エレクトロニクス系専攻図書室(情報科学研究科図書室)について… 8 | 学術研究コンテンツ小委員会委員名簿・点検評価小委員会委員名簿…21 |
| お知らせ                                | 人事往来……………22                       |
| 来館日誌……………10                         | 附属図書館・北分館・部局図書室の開館(室)時間…24        |
| 平成16年度[後期]研修出張報告会が開催される…11          |                                   |
| 北京大学図書館との相互交流および協力に関する覚書の締結について…12  |                                   |

## 『十五少年漂流記』から 『大東亜戦争陸軍衛生史』へ

附属図書館長 逸見 勝 亮

図書館長就任にあたり、長い前置きと図書館職員への感謝とを記しておきます。

◇伯父が小学生の僕に与えてくれたのは、『小学〇年生』という小学館の学習雑誌でした。この雑誌は、近所の子たちが読んでいた『冒険王』『少年クラブ』とは交換価値がほとんどありませんでした。僕は誰も読まなくなったころ、たいていは1ヶ月遅れで「赤銅鈴之助」や「イガ

グリ君」を読むこととなりました。母が買ってきた『少年朝日年鑑』は何度繰っても僕には飽きない本でしたが、月刊雑誌と交換できる代物ではありません。



◇僕は小学校3年生の時に学校に図書室があることを知り、「読書クラブ」に入りました。上級生がカール・ブッセの「山のあなた」を載せた新聞を作る、と熱っぽく語ったのを覚えています。部員としてどんな活動をしたのかは忘れてしまいました。図書室で最初に読んだのはジュール・ヴェルヌ『十五少年漂流記』です。港町に育った僕は船には格別の憧れを懐いていましたので、「漂流」に惹かれて読みました。続けて『海賊船』『クオレ物語』を読みました。記憶しているのは3冊だけですが、我が家では、小さな国語辞典・学習雑誌・婦人雑誌・新聞以外に読むべきものを蔵しておりませんでしたので、小学校の図書室を知ったのは僕にとって2度目の文明開化でした。最初はもちろん文字の読み書きです。

◇そのころ祖母にシジュウカラを飼う鳥籠をねだったことがあります。鳥籠を売っている店の隣は本屋でした。僕は本を買いたくて予定より安い籠を求め、浮いた金で子ども向けの『宮本武蔵』を購入しました。これが僕が最初に買った本です。5年生の担任は蔵書を教室に置いて僕らの自由にさせました。多色刷りの『博物学』で「オオミズアオ」を知り、夏の夜に実物を観たときは興奮しました。僕は昆虫少年になりかかったのです。6年生のときに転校した学校には図書室がありませんでした。その頃、向かいの下駄屋で店番をしている青年が読んでいるのは安い「文庫本」だと知りました。僕はときどき40分もバスに乗って本屋へ行くようになりました。最初に買った文庫本はシートン『動物記』と下村湖人『次郎物語』です。『宮本武蔵』を繙くことはもうありませんでした。

◇中学校にも図書室はありませんでした。英語の教師からカフカ『変身』を借りて読んだのが、外国文学と自覚的に接した最初です。高校の図書室は充実しており、小説を読み漁り、解らぬ

ままにサルトルを囓っていました。日本文学史を高校1年夏の補習授業で聴き、欲張って求めた藤村 作『国文学史総説』(角川文庫)が教科書よりおもしろかったのは確かです。その年に「ゾッキ本」市で茶屋半次郎『文楽』(写真は入江泰吉)を求めました。この本の冒頭を飾っているのは吉田文五郎操る「艶姿女舞衣(あですがたおんなまいぎぬ)」上塩町酒屋の段のお園の写真です。吉田文五郎、吉田栄三、鶴沢叶、豊竹山城少掾の芸談には心が震えました。僕の文楽への惑溺の始まりです。吉田箕助が操り、豊竹嶋太夫が語り、竹沢団六が弾くお園のくどき「今ごろは半七様、どこでどうしてござろうぞ……」を観て聴いたのは、それから43年後の2000年9月5日の国立劇場小劇場です。

◇僕が北大へ入学した当時は、現在の図書館は建設中で、明治36年に竣工し、現在も、北大図書刊行会などが使用している旧札幌農学校図書館が中央図書館でした。図書館の雰囲気はとてもいいものでしたが、勤勉とは言い難い僕のような学生にとって、大学の職員は苦手な存在であり、附属図書館も利用しにくいものでした。本を自分の手許に置きたいという願望も強かったので、バイトで得た金は本代となり、卒業論文に取り組むまでは、図書館は縁遠い存在でした。その有り難みを人にも言えるようになったのは、院生となってから、本を探すための参考図書なる書物の一群の存在を知り、書庫を利用できるようになってからです。勉強するには、膨大な蔵書の中から自らの判断で必要な書物を選び出さなければならぬと知ったのは、幾度目かの文明開化でした。修士論文に備えて、2ヶ月間書庫で30年分の新聞を読みノートを取りつけました。論文に必要な記事が、化粧品・映画・雑誌の広告、小説、投書、コラムなどに囲まれているさまを確かめることは、資料となる記事が紙面で占めている位置を知るうえで、結構重要なのです。以来附属図書館は僕の生活の

不可欠な一部となりました。

◇探しあぐねていた僕の依頼に応じて、第一復員省編『支那事変大東亜戦争間動員概史』を厚生省が所蔵していることを調べ上げてくれた職員の探索力には舌を巻きました。タイプ謄写印刷の分厚いこの本を手にしたときの感慨は忘れがたいものがあります。また別の職員に、陸上自衛隊衛生学校編『大東亜戦争陸軍衛生史』を

すぐ読めないかと頼んだら、その日の内に陸上自衛隊北部方面総監部から全9冊を借りてくれました。国会図書館から借りなければ駄目かなと思っていたので、本当に助かりました。

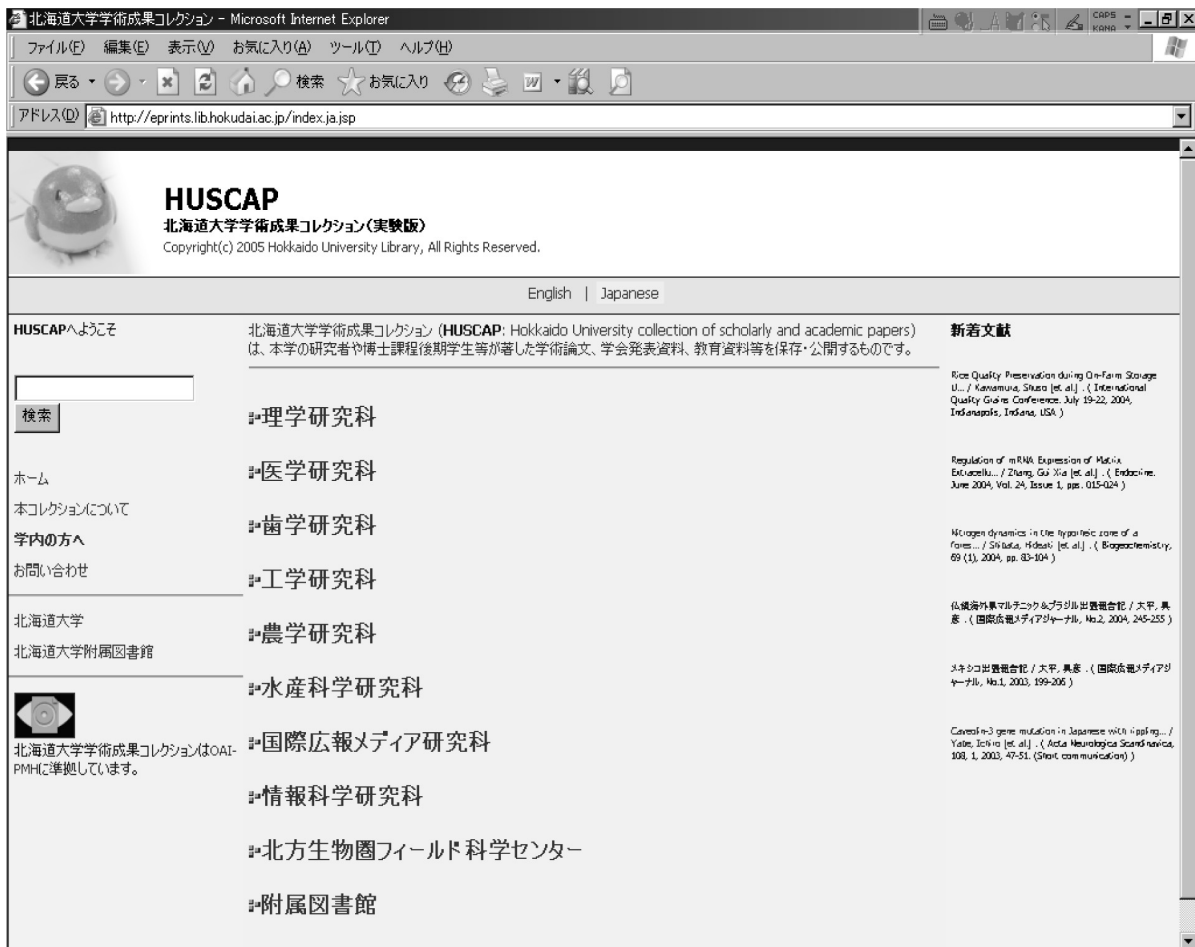
図書館書庫は配置もずいぶんと変化したので、かつて諳んじていた配架場所の記憶は役に立ちませんが、書物が放つ独特の匂いに満ちた書庫にいれば心安らぐというのは、誇張ではありません。

# 北海道大学学術成果コレクションの実験運用について

## 1. 北海道大学学術成果コレクションとは

附属図書館では、2005年7月20日から、「北海道大学学術成果コレクション」(Hokkaido University collection of scholarly and academic papers ; 略称 <sup>ハスカップ</sup> HUSCAP) の実験運用を実施しています。

北海道大学学術成果コレクション <<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/index.ja.jsp>>



<sup>ハスカップ</sup> HUSCAP は、本学で生産された電子的な学術成果を保存し、原則的に無償で公開することを目的として構築・運営されるインターネット上の新しい情報発信システムです。

このような学術機関による情報発信の新しいシステムは、欧米諸国を中心に急速に普及が進んでいます。欧米では一般的に「学術機関リポジトリ (Institutional Repository)」と呼ばれることが多いようですが、この名称は特に日本では一般に馴染みのないものであるため、附属図書館では、「学術成果コレクション」という名称を用いています。

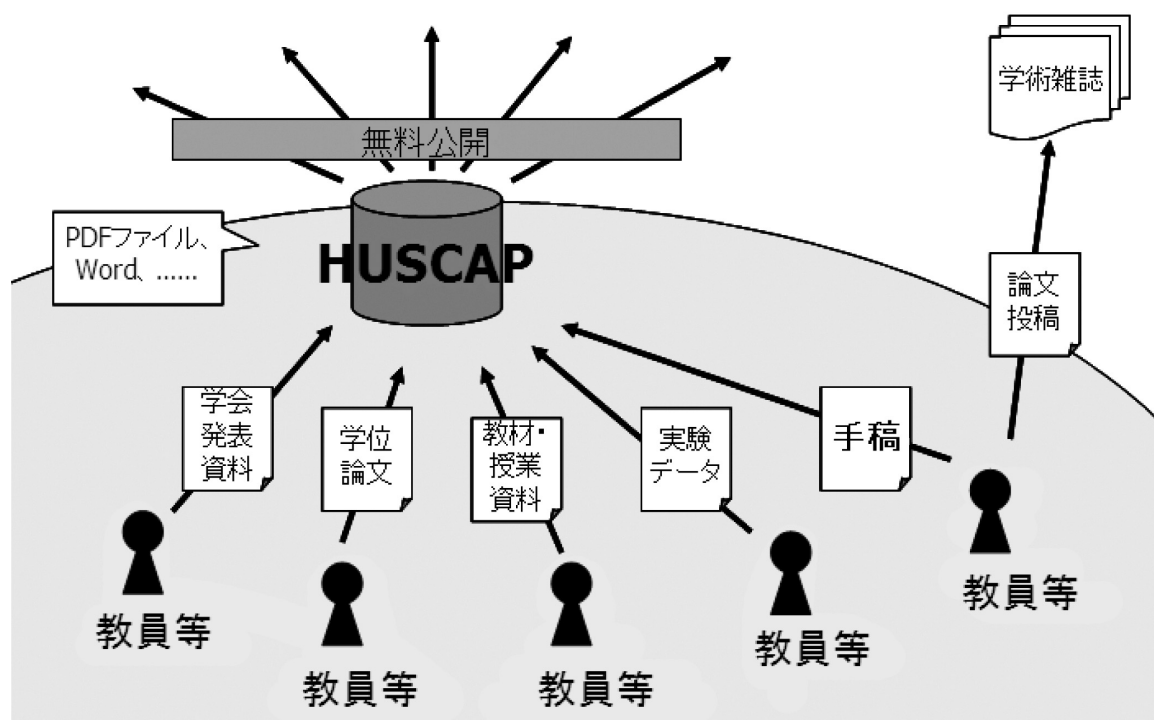
欧米においてこのような新しい情報発信システムが開発され普及しつつある背景としては、ひとつには、インターネットのグローバルな普及や学術情報の急激な電子化等を基盤として、機関が活動成果をネットワークを介して広く公開することにより、機関の活動の説明責任、社会的認知度・評価の

向上を図ろうとする戦略的な意図があります。

更に、研究・教育活動の成果をいわば社会全体の公共財として位置付け、無償で公開することを通じて社会に還元していこうとするオープン・アクセスの考え方が広まってきたことも大きな背景となっています。

また、オープンアクセス論文については、その被引用率が非オープンアクセス論文より格段に高いという調査結果報告も出されています。

国内においても、科学技術基本計画や審議会の提言等において、大学等研究機関の情報発信機能の強化の重要性が随所で指摘されるようになってきています。



附属図書館では、昨年度から学術機関リポジトリの設置に関する検討を開始し、報告書「北海道大学における学術機関リポジトリの在り方について」(第198回図書館委員会, 2004年10月)に基づいて、「学術情報発信に関するアンケート調査」(2004年10月～11月, 本誌119号参照), 「北海道大学学術リポジトリ(仮称)」の実験運用(2005年3月～5月)を実施してきました。

7月20日から開始した新たな実験運用は、先行実験運用の結果を踏まえ、研究者の方々の負担を大幅に減らし使用感のよいシステムに改善すること等で、より多くの方の参加及び、次に示す効果を期待するものです。

(1) 研究成果の可視性(Visibility)の向上

インターネットを介して無償で公開することにより、教員等の研究成果の可視性が飛躍的に向上する。Googleなどの世界的な検索エンジンからも検索が可能であり、潜在的な読者層にまで広く成果を公表するための、最も簡便で効果的なシステムである。

(2) 電子化された知的生産物の長期保存

個人による管理・保存・配信が困難なデジタル資料に対して、統一的窓口から、一元的管理によ

る長期的な保存・アクセスを保証する。

(3) 研究成果の社会還元

研究成果を無償で配信するサービスであり，研究成果を社会に還元する方法として，最も望ましいシステムと言える。また，このシステムにより社会に還元される研究成果は，その内容，地理的条件等から，特に北海道において貢献度が高くなると考えられ，地域連携，産学連携をより一層促進する。

(4) 研究・教育資源の共有化

研究・教育に関する情報がいつでも無償で利用できることから，学内外の研究・教育関係者間における情報資源の共有化が一層促進される。

(5) 大学法人としての本学のアカウンタビリティの向上

本学で生産されたさまざまな研究成果をインターネットを通じて広く発信することにより，社会に対する大学の研究・教育活動の説明責任を果たし，また先進的研究成果を迅速に配信することにより，大学の知名度・ランクを高め，知の創造と発信という大学の使命を側面より支えることになる。

(6) 学術情報流通のオープン化

全国・世界規模でこのようなシステムが機能することにより，無償で自由に利用できる学術情報量が増大し，商業主義主導の学術情報流通を改善する一助となる。

## 2. <sup>ハスカップ</sup> HUSCAP 実験運用の概要

本実験運用では，研究・教育活動の成果を電子的資料（ファイル）として寄贈していただき，その資料の公開について著作権上の問題がないかどうかを確認した上でシステムに保存し，インターネットを介して全世界に公開します。

(1) 本実験運用では，以下の方々の電子的資料を収集します。

教員等（教授・助教授・講師・助手，特任教授・助教授，客員教授・助教授，寄附講座教員，外国人教師），技術職員，教務職員，図書系事務職員，大学院博士後期課程在籍の学生，その他特に申し出のあった者

(2) 本実験運用で保存・公開する資料は以下のようなものです。

① 公表済資料

商業出版社もしくは学協会が発行する，冊子体または電子的な学術雑誌や会報に掲載されたことのある資料。講演会・発表会等において使用したことのある発表用資料，会議資料。紀要等の学内雑誌，広報誌等に掲載されたことのある資料。その他，著書において使用するなど，何らかの形で公表したことのある資料。

② 教育資料

研究指導・講義等の教育的な目的で作成した教材，講義資料。公表・未公表を問わない。

(3) 資料の寄贈方法は，電子資料のコピーと出典等の情報及び提供者のメールアドレス等を電子メールで附属図書館に送っていただくだけです。学術雑誌等掲載論文については，Elsevier 等海外主要出版社をはじめとした91%の雑誌が，大学からの独自公開を許容しています。ただし，出版社ごとに条件を定めている場合があります。特に，電子ジャーナルからダウンロードしたPDF ファイルや，出版社のロゴ等が入った出版社作成ファイルの公開についてはこれを禁止し



ている出版社が多いので、ご自身が作成した原稿ファイルをお送りください。大学での資料公開について出版社が定める許諾条件等、著作権上の問題の有無についてはすべて附属図書館が確認します。

詳細は、<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/staff/index.jsp> をご覧ください。

(4) 実験運用の期間は、平成17年7月20日～平成18年2月末日です。

附属図書館では、多くの方々のこの実験運用へのご参加・ご協力をお待ちしております。

## 情報エレクトロニクス系専攻図書室(情報科学研究科図書室)について

情報エレクトロニクス系専攻図書室は、平成14年10月に、それまでの学科図書4分室(電気・電子・精密・情報)を統合して、現在の情報科学研究科棟1階に図書館職員3名の配置で誕生しました。

平成16年4月に、工学研究科のシステム情報工学専攻と電子情報工学専攻ならびに電子科学研究所等の改組再編で、情報科学研究科(定員数で教員115名、大学院生(収容定員480名:修士354名、博士126名))が設置されました。当研究科に対応する学部学生(収容定員720名)は工学部に所属しています。

閲覧スペースには、IT時代に対応するように検索コーナーとしてパソコン10台を設置し、教員・学生は自由に利用できます。閲覧用座席28席にラウンジコーナーが併設され、ゆとりのある設計であることから、気兼ねなく閲覧が出来る利用者からも好評を得ています。



IEEE 資料をバックに

所蔵資料数は、9700冊(和雑誌2710冊、洋雑誌6330冊、和書420冊、洋書240冊)です。閲覧室の雑誌架には新着と未製本雑誌を配架しています。書庫部分は閲覧室併設で開架式の、電動式集密書庫(約2万冊収容可能)です。入口部分に所蔵雑誌のタイトル毎の棚番号一覧表を掲示して、一目で配架場所がわかると、利用者に好評です。

平成16年からは、IEEE(ASPP = All-Society Periodicals Package)118誌の印刷体を図書室に配架・所蔵しています。また、閲覧・複写の要望が多い「電子情報通信学会技術研究報告」全タイトルについて、学内OPACで検索可能にするため整備中です。

開室時間は午前9時から午後5時までです。時間外については、入室装置による本研究科教員限定の利用運用中です。



情報科学研究科棟は冷暖房・換気等、防災センターで集中管理される最新の研究棟です。とくに図書室は床暖房が完備され、天井吹き抜けと全面ガラスの外壁部分もある開放的で快適な居住空間づくりがなされています。

現在、図書館職員2名で閲覧業務を中心とする図書業務を担当しています。OPACの所蔵データの増加と施設の充実に伴い、他研究科・学部や学外利用者も増加傾向にあります。文献の検索や複写に至るレファレンス業務においても利用者の立場になり快適にご利用いただけるようより一層努力したいと考えております。



吹き抜け閲覧室



カウンターから書庫へ

利用の詳細につきましては、情報科学研究科図書室のページをご覧ください。

(<http://www.lib.hokudai.ac.jp/faculties/eng/dpt/ist.html>)

(北海道大学附属図書館 HP ⇒部局図書室 (工学研究科・工学部図書室) にリンク有ります)

[工学研究科・情報科学研究科・工学部総務課図書閲覧係 廣中・佐藤]